

# 令和7年度 学校評価

## 本年度の重点目標

### (1) 生徒一人一人の個性や可能性を伸ばす教育の推進・充実

#### ① 生徒の夢の実現を支援するカリキュラム・マネジメントとキャリア教育の推進

- ア 進学型単位制の特長を生かした、幅広い科目選択が可能な教育課程を編成する。
- イ 授業力向上プロジェクトチームを設置し、教科横断型カリキュラムを開発し、STEAM教育の実施に向けて取り組む。
- ウ 地域や大学・専門機関などと連携した取組を拡充し、生徒が自己を客観的・肯定的にみつめる機会を増やし、自己理解力を育成する。
- エ 将来を見通した直近の進路選択への助言など、生徒の能力や適性を理解して、一人一人のキャリア形成を支援する、きめ細やかな進路指導を行う。

#### ② 学ぶ意欲を向上させる学習指導の充実

- ア 校内外の研修等により工夫改善に取り組み、わかる授業、生徒自らが主体的に学びに向かい、確かな学力の育成につながる教科指導を実践する。
- イ 生徒の学習環境や進路目標に応じ、自習室の活用やICTを活用した課題配信など、個別最適化された学びの充実を図る。
- ウ 全ての生徒を対象とした課題研究や探究活動等により、エビデンスをもとに深く思考し、探究する力を育成する。
- エ 課題研究や探究活動等の成果を生かした学会発表やコンテスト等への挑戦を促すなど、研究成果の積極的公開に努め、生徒の伝える力を向上する。

#### ③ 読書活動の推進

- ア 生徒の自主的な読書活動を推進する。
- イ 読書を通して先哲の生き方に触れる等、生徒の夢や目標の実現につながる読書習慣の形成を図る。

### (2) 人権尊重の精神を培い、多様な人々と共創できる人間関係形成・社会形成能力の育成

#### ① 人権教育の充実

- ア 人権尊重を柱に据えた教育活動を推進する。
- イ 人権に対する感性を磨き、自他の生命の尊さを認識し、多様性を認め、相手の立場に立って行動することができる人づくりを推進する。
- ウ 学校の教育活動全体を通じて道徳教育を展開するとともに、情報モラル教育を体系的に推進する。

#### ② キャリア教育の要としての特別活動の充実

- ア 教科教育を含む全ての教育活動で取り組むキャリア教育の要としてホームルーム活動・生徒会活動・部活動等を活性化し、「かかわる力（人間関係形成・社会形成能力）」や「すすむ力（課題対応能力）」を鍛える。
- イ 委員会等、生徒主体の多様な組織を活性化し、「みつめる力（自己理解・自己管理能力）」「すすむ力」を育む。
- ウ ボランティア活動等を通して、社会参画意識を高め、豊かな人間性を育む。

#### ③ グローバルな視野で活躍できる人材育成につながる教育の推進

- ア 姉妹校との国際交流等を通して、グローバル社会を生き抜くための国際理解力を養う。
- イ コミュニケーション能力を高め、多様な価値観を持つ人々とともに納得解を得るために協働でき、共創する能力を育成する。

#### ④ 誰一人取り残さない生徒指導の充実

- ア いじめを許さない体制・環境づくりに取り組み、安全安心な学校の実現を図る。
- イ 社会の一員としてのモラルやマナーを習得させ、基本的生活習慣の確立を図る。
- ウ 生徒一人一人を大切にしたい指導を通じ、他者を思いやる心や自尊感情を育てる。
- エ 学校・家庭・地域の連携や協力を密にして、生徒の心に響く生徒指導を行う。

#### ⑤ こころとからだの健康教育の充実

- ア 「早寝、早起き、朝ご飯」や適度な運動、心身の健康管理等、健康教育の充実を図る。
- イ 教育相談に対する教員のスキルアップ等、教育相談体制の一層の充実を図る。
- ウ 一人一人の特性に応じた特別支援教育の充実を図る。

### (3) 「質実剛健」のもと、たくましさを養い、社会の創り手としての実践力の錬磨

#### ① 18歳成年を踏まえた主権者教育・消費者教育の推進

- ア 政治や選挙への関心を高め、社会の創り手である主権者としての政治的素養を育む。
- イ 18歳成年に対応し、消費者被害等の危機を自ら回避できる能力を育成する。
- ウ 持続可能な社会の実現に向けた消費行動を実践できる能力を育成する。

#### ② 持続可能な社会の実現に向けた環境教育・安全（防災）教育の推進

- ア 環境問題に強い関心を持ち、校内外の環境美化活動やボランティア活動等を通して、よのなかを自分事として捉える社会参画意識を高める。
- イ 教科における防災教育の充実に加え、避難訓練や防災クラブ活動をはじめとする活動を通じて防災意識の向上に務め、発災時の減災を意識した平常時の意識改革を図る。
- ウ 生徒・教員ともに心肺蘇生法やAED使用等の研修を実施し、危機管理意識を高める。

### (4) 地域に信頼される学校となるための、教職員の資質向上と開かれた学校づくり

#### ① 開かれた学校づくりの推進

- ア 体験入学、学校公開、地域説明会等を通して、積極的に教育活動の公開を推進する。
- イ ホームページ等を活用して、積極的な情報発信を推進する。
- ウ 学校運営協議会等を利用し、PTA、牛岐同窓会、地域社会との連携を図る。

#### ② 持続可能で信頼される学校づくりの推進

- ア 「風通しの良い職場環境」づくりに努め、校務運営体制の効率化と充実を図る。
- イ 研修等の実施により、教職員のコンプライアンス意識の高揚を図る。
- ウ 校内外の研修等を通じて、教職員の指導力の向上を図る。

徳島県立富岡西高等学校

# ◎生徒一人一人の個性や可能性を伸ばす教育の推進・充実

## 重点課題（１） 生徒の夢の実現を支援するカリキュラム・マネジメントとキャリア教育の推進

重点目標		自己評価		学校関係者評価		次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標と活動計画	評価	総合評価			
<p>①進学型単位制の特長を生かした、幅広い科目選択が可能な教育課程を編成する。</p> <p>②授業力向上プロジェクトチームを設置し、教科横断型カリキュラムを開発し、STEAM教育の実施に向けて取り組む。</p> <p>③地域や大学・専門機関などと連携した取組を拡充し、生徒が自己を客観的・肯定的にみつめる機会を増やし、自己理解力を育成する。</p> <p>④将来を見通した直近の進路選択への助言など、生徒の能力や適性を理解して、一人一人のキャリア形成を支援する、きめ細やかな進路指導を行う。</p>	評価指標	評価指標による達成度	(評定)	総合評価		<p>本年度、地域や産業界と連携した出前授業やコンテストへの参加者数が増加し、生徒が学校の外へと学びの場を広げている点は高く評価できる。「自らを地域社会と結びつけて考える」という視点が、カリキュラム全体に浸透しつつあることが伺える。特に、従来の座学中心の学習スタイルから、地域課題の解決や産業の創出といった「答えのない問い」に挑む実践的な学習へとシフトしている点は評価できる。生徒からは「より深く理解できた」との肯定的な反応が得られており、実社会との接点が学習意欲の向上に直結していることがうかがえる。</p> <p>今後は、単発のイベント参加や授業実施にとどまらず、地域企業や行政と連携した通年型の探究プロジェクトへと深化させることを期待したい。例えば、コンテストへの参加をゴールとするのではなく、そこで得た知見を地域へ還元するプロセスまでを学習活動に組み込むことで、生徒の自己有用感ほさらに高まるはずである。また、こうした活動に参加する生徒が一部の意欲的な層に留まらないような仕掛け作りも求められる。</p> <p>ICT活用により、進路希望の可視化を行い教員間の情報共有が円滑になった。引き続き効果的な活用について検証していきたい。</p>	
	①	令和8年度の教育課程を編成する。	① 教育課程検討委員会を2回実施し、生徒の実態に合わせた教育課程の編成に努めた。	A	B		
	②-1	STEAM教育に関する深い知識や指導スキルを習得し、授業実践ができる教職員の割合80%以上	②-1 肯定的な意見が100%でSTEAMへの関心が深く、研修により全校体制での取組が可能である。	B			
	②-2	自ら課題を見つけ学びに取り組む姿勢や、他者と協力して目標達成を目指す協働性が向上したと回答した生徒の割合90%以上	②-2 90.3% 課題解決に向けた議論が活発化した。	A			
	③-1	自身の興味関心、得意なこと・苦手なこと、価値観、将来の夢などをより深く理解していると回答した生徒の割合90%以上	③-1 82%の生徒が、大学等との連携した取組が将来について考える良い機会となったと考えている。	B			
	③-2	将来の目標を設定し、その実現に向けた具体的な計画を立てる能力が向上したと回答した生徒の割合90%以上	③-2 85%の生徒が進路選択の幅が広がったと回答している。	B			
	④-1	進路希望調査を年間2回実施する。（校外模試の志望校調査を除く。）	④-1 3年次は4月、1、2年次は4月、10月に実施した。	B			
	④-2	進路指導における関連機関等と連携し、進路講演会等のキャリア教育行事を年間2回以上実施する。	④-2 3年次は6月に1回、2年次は9月、12月、1年次は10月、12月に実施した。	A			
	活動計画	活動計画の実施状況					
	①	他のSSH校の教育課程を研究し、生徒の実態に即した教育課程の編成に努める。	① 他県のSSH校の視察を行い、令和8年度開設予定の新科目「サイエンス情報」「サイエンスイングリッシュ」の準備を行った。				
②-1	STEAM教育に関する基礎研修だけでなく、先進的な事例研究やワークショップ、外部専門家による指導などを継続的に実施し、教職員の理解と実践力を段階的に向上させる。	②-1 先進校視察及び担当者交流会により、実践可能な事例を検討し、富西STEAM教育の確立に向けて、教職員研修を発展させることができた。					
②-2	グループワーク、ディスカッション、実験、製作、プログラミング、プレゼンテーションなど、多様な活動を通して、生徒の多角的な能力を育成する。	②-2 STEAMの日は設定し、2学年全体で、クラスを解体し、生徒の活動重視型の教科横断型授業を行った。体育×英語、数学×地理など様々な教科・科目を組み合わせた授業を実施した。					
③-1	課題研究における連携だけでなく、講演会、ワークショップ、キャリア相談会、インターンシップなど、様々な形で地域や大学・専門機関と連携する機会を設ける。	③-1 JAXA職員による出前授業、阿南光高校の高大連携授業に参加し、高校との連携を拡大させた。台湾研修の事前研修として、博物館の学芸員による研修を実施するなど連携先が増加した。					
③-2	地域課題をテーマにした探究活動やワークショップを実施し、生徒が地域社会との繋がりを意識しながら自己の役割を考える機会を提供する。	③-2 大阪大学・阿南市役所と連携し、生徒が阿南市の政策を元に考案したフューチャーデザイナーワークショップを実施した。					
④-1	スタディサプリを利用することで、すべての教員がリアルタイムで生徒の進路希望を把握できるようにする。	④-1 スタディサプリを活用して、進路希望調査を実施し、すべての教員が画面上で生徒の進路希望を把握できるようにした。					
④-2	生徒の進路実現に向けて、進路講演会等のキャリア教育行事を系統的に実施する。	④-2 学年別に内容を系統化し、進路意識形成から具体的な進路決定まで段階的に支援を行った。					

重点課題（２） 学ぶ意欲を向上させる学習指導の充実

重点目標		自己評価		学校関係者評価	学校関係者の意見	次年度への課題と今後の改善方針
		評価指標と活動計画	評価			
		評価指標	評価指標による達成度	(評定)	総合評価	
<p>①校内外の研修等により工夫改善に取り組み、わかる授業、生徒自らが主体的に学びに向かい、確かな学力の育成につながる教科指導を実施する。</p> <p>②生徒の学習環境や進路目標に応じ、自習室の活用やICTを活用した課題配信など、個別最適化された学びの充実を図る。</p> <p>③全ての生徒を対象とした課題研究や探究活動等により、エビデンスをもとに深く思考し、探究する力を育成する。</p> <p>④課題研究や探究活動等の成果を生かした学会発表やコンテスト等への挑戦を促すなど、研究成果の積極的公開に努め、生徒の伝える力を向上する。</p>	<p>① 授業評価において、肯定的な評価をした生徒の割合 90%以上</p> <p>② スタディサプリや週末課題等は、生徒の家庭学習時間の確保・増加につながっていると回答した生徒の割合 5%増（昨年度比）</p> <p>③ 表面的な知識の習得に留まらず、本質的な理解を深め、多角的な視点から批判的に考察する能力が向上したと回答した生徒の割合 90%以上</p> <p>④-1 発表内容が、論理構成、表現力、専門性、質疑応答の適切さなどの観点から、段階的に向上したと回答した生徒の割合 90%以上</p> <p>④-2 学会発表や科学コンテスト等へ参加した生徒の延べ人数 100人以上</p>	<p>① 授業が分かりやすいという肯定的な評価をした生徒の割合 94%</p> <p>② 肯定的な回答をした生徒の割合 62%（昨年度60% 昨年度比2ポイント増）</p> <p>③ 科学的な思考と問題解決能力が向上したと回答した生徒の割合 85%</p> <p>④-1 発表や議論を通して、伝える力の向上を意識したと回答した生徒の割合 89.4%</p> <p>④-2 コンテスト等への参加者した生徒の人数 延べ102名 &lt;主な入賞&gt; ・中国四国九州理数科課題研究発表大会（最優秀賞） ・近畿総合文化祭（最優秀賞） ・ロボットアイデア甲子園四国大会（最優秀賞）、同全国大会（決勝進出・優秀賞）</p>	<p>A</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>A</p>	<p>B</p> <p>(評定)</p> <p>(所見) 7月の授業評価アンケート（93%）から12月（94%）に上昇し、半年間での授業改善の効果がみられた。 スタディサプリの導入により、生徒は自分のペースで学習を進められるようになり、学習意欲の向上につながっているが十分ではなく（60%→62% 2ポイント上昇）、引き続き学習の定着のため、個別最適化学びの支援を充実する必要がある。 探究する力を育む取組を計画的に実施したが、設定した指標のうち2項目が目標値に到達しなかった。普通科と理数科による合同発表会の実施や、外部専門家の助言は一定の成果を挙げ、積極的な情報発信が生徒の意欲向上につながり、研究を学外へ積極的に発表する参加生徒は目標値を超えることができた。</p>	<p>スタディサプリ等のICTツールを活用した学習支援が定着し、生徒個々の習熟度に合わせた「個別最適化学び」が推進されている。授業評価アンケートにおいて「授業がわかりやすい」といった肯定的な意見が高い水準で維持されていることは、ICTを単なる機器としてではなく、授業改善の有効なツールとして教職員が使いこなしている証左である。特に、板書とデジタル教材を効果的に組み合わせたハイブリッドな授業展開は、視覚的な理解を助けるだけでなく、授業の効率化を生み出し、生徒が思考・表現する時間を確保することに寄与していると推察される。 ICT環境の整備が一巡した今、次のフェーズとして「協働的な学び」への活用をさらに深めていただきたい。スタディサプリによる個人の知識習得を前提としつつ、教室ではその知識を持ち寄って議論を行うアプローチの拡大が望まれる。また、デジタル上での学習履歴を教員が生徒指導や進路指導に組織的に活用する体制を強化し、データに基づいたきめ細やかな指導を確立することで、学力層を問わず全ての生徒の可能性を引き出す授業づくりに邁進してほしい。</p>	<p>スタディサプリを活用した学習が、生徒の主体的な取組や学習意欲の向上には一定の効果を受けている一方で、学習内容の定着状況に個人差が見られる。学習履歴や取組状況を十分に分析・活用し切れていない場面があり、個別支援に結びつける体制の強化が課題である。 課題研究での取組が「深い学び」と自覚できるよう、「問いの設定→検証→考察」の段階的な指導プログラムを整備し、探究スキルを可視化できる取組を進めるとともに、成果発信としてのコンテスト等参加についても引き続き向上させたい。 特定教員・特定生徒の取組に留めることなく、校内での横展開を更に進め、あわせて校外への積極的な広報による自己肯定感の向上も意識させたい。</p>
		<p>活動計画</p> <p>① 生徒による授業評価を7月・12月に実施する。</p> <p>生徒によるルーブリック評価を5月、9月、12月に実施する。</p> <p>② 週末課題を精選する。スタディサプリを授業の延長線上に位置づけ、生徒に活用を促す。</p> <p>③ 大学等との連携において、オンラインでの相談や情報共有のプラットフォームを導入し、生徒が時間や場所にとらわれずにサポートを受けられるようにする。</p> <p>④-1 普通科と理数科の合同発表会を実施し、生徒が多様な視点や研究に触れる機会を提供する。</p> <p>④-2 理科系のイベントの案内を全校集会や、スタディサプリ等で適宜発信し、学会発表や科学コンテスト等への参加を促す。</p>	<p>活動計画の実施状況</p> <p>① 7月と12月に実施した。</p> <p>6月と1月に自己評価を実施した。</p> <p>② スタディサプリ活用週間や、週末課題、到達度テストの復習課題として活用を促した。</p> <p>③ 生徒が、直接研究機関等とやり取りができるよう、指導体制を整え、研究のアドバイスをいただくことができた。</p> <p>④-1 2年次生において、普通科及び理数科との合同発表会を体育館で実施し、大学及び専門機関の方に、指導助言をいただいた。</p> <p>④-2 スタサブ配信と併用して、SHR時の案内用に、クラス掲示用チラシを作成し、イベント参加者募集を促した。</p>			

重点課題（3） 読書活動の推進

自己評価				学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
重点目標	評価指標と活動計画	評価		学校関係者の意見	
	評価指標	評価指標による達成度	(評定)	総合評価	
①生徒の自主的な読書活動を推進する。  ②読書を通して先哲の生き方に触れる等、生徒の夢や目標の実現につながる読書習慣の形成を図る。	① 読書週間を1・2学期に設け、期間中に読書会を開催する。	① 読書週間を1・2学期に設けた。また読書会を1学期末に実施。第2回は2月に開催予定。	A	B	読書会などの有機的な取組は、活字離れが叫ばれる昨今において極めて重要である。「図書館は豊かな学びの場」という認識のもと、単に本を貸出す場所としてではなく、知的好奇心を刺激する空間として機能させている点を評価したい。特に、図書室に足を運ぶきっかけ作りとしてのイベントや、他校種との交流は、生徒のコミュニケーション能力や共感性を育む効果も生んでいる。読書を「趣味」の領域から「学習・探究の基盤」へと高めようとする学校側の意図が感じられ、生徒の文化的素養の底上げに寄与している。 今後は、総合的な探究の時間や各教科のレポート作成と連動した展開を期待する。インターネット検索のみに頼りがちな現代の生徒に対し、書籍を通じた体系的な情報収集や、信頼性の高い文献にあたる重要性を指導することは、情報リテラシー教育の観点からも急務である。司書と教科担任が連携し、授業の中に文献調査のプロセスを意図的に組み込むことで、大学進学後や社会に出てからも通用する「調べる力」「読み解く力」を養っていただきたい。
	② 一人あたりの図書室利用回数 年間15回以上 一人あたりの本の貸出冊数 3.5冊以上	② 一人あたりの図書室利用回数 11.7回(12月末現在) 一人あたりの本の貸出冊数 2.1冊(12月末現在)	B		
	活動計画	活動計画の実施状況	(所見)		
① 読書会を年2回実施し、図書委員が課題図書を選定し会の運営にあたるなど積極的に関わる。生徒相互が意見交換を行う機会とする。	① 読書週間において図書委員がアイデアを出し合い、おすすめの本のチラシやポップの展示、プレゼント企画等を行った。また、読書会において書評合戦ゲーム「ビブリオバトル」を初開催し、活発な意見交換を行った。会の進行、ポスター・アンケート作成を図書委員が担当した。	① 一部の生徒の来館、図書館活動への参加を促すきっかけになったが、生徒全体の「読書会」や「Library News」への認知、興味・関心は依然として低く、普段図書館を利用しない生徒へのアピールとしては弱かったと考えられる。 生徒の利用促進に向けて、机・椅子の新規導入などハード面の環境整備にも努めている。		学校図書館においては、生徒、教職員にとって図書館が利用しやすい、また居心地の良い空間となるよう、読書環境の整備を進める。次年度は引き続き設備やレイアウトの更新に力を入れたい。 「Library News」や読書会等が生徒により幅広く認知され、また関心を持たれるよう、図書委員と相談しながら内容と周知方法の刷新を図りたい。また、130周年記念事業等の学校行事に合わせた展示や環境整備など、その他の図書館活動のさまざまな場面においても、図書委員が主体的に参加できる機会を多く設け、図書館や読書を生徒に身近に感じてもらえるような取組をともに考えていきたい。 探究活動や各教科の担当との連絡を密にし、図書の購入、授業での調べ物、情報リテラシー能力育成等の学習支援等に向けた連携を行うことで、学校図書館の「学習・情報センター」としての機能を高めていきたい。	
② 学校図書館の利用について1年次でオリエンテーションを行う。図書委員が「Library News」作成を担当し毎月発行し、学校図書館利用を呼びかける。また、スタディサプリでも発信する。	② 1年次で学校図書館の利用オリエンテーションを行い積極的な利用を呼びかけた。図書委員が作成に参加した「Library News」を図書館内にて配布、スタディサプリでも配信した。 生徒の利用環境向上にむけて、机・椅子を1月に新規導入した。				

# ◎人権尊重の精神を培い、多様な人々と共創できる人間関係形成・社会形成能力の育成

## 重点課題（１） 人権教育の充実

自己評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
重点目標	評価指標と活動計画	学校関係者の意見	
<p>①人権尊重を柱に据えた教育活動を推進する。</p> <p>②人権に対する感性を磨き、自他の生命の尊さを認識し、多様性を認め、相手の立場に立って行動することができる人づくりを推進する。</p> <p>③学校の教育活動全体を通じて道徳教育を展開するとともに、情報モラル教育を体系的に推進する。</p>	<p>評価指標</p> <p>① 人権ホームルーム是人権意識の向上につながっていると回答した生徒の割合 80%以上</p> <p>② 啓発新聞「じんけん富西」の発行や「富西人権の日」のメッセージ、映画会、講演会等は、人権意識の高揚につながっていると回答した生徒の割合 80%以上</p> <p>③ SNSやインターネットに関する情報モラルを身につけて、適切に利用できると回答した生徒の割合 85%以上</p>	<p>評価指標による達成度</p> <p>① 回答した生徒の割合 88%</p> <p>② 回答した生徒の割合 86%</p> <p>③ 回答した生徒の割合 97%</p>	<p>インターネットやSNSが日常の一部となった現代において、ネットいじめや人権侵害を「自分事」として捉えさせる指導が徹底されている。人権教育について「十分理解した」という生徒の自己評価が見られる点は、学校の啓発活動が表面的な知識伝達に終わらず、生徒の心に届いていることを示している。特に、SNS上でのトラブル事例など、身近なリスクを題材にすることで、被害者にも加害者にもなり得るというリアリティを持たせた指導ができていてと評価できる。人権尊重の精神は学校生活の根幹であり、安心して学べる環境づくりの基盤となっている。</p> <p>デジタル空間における人権課題は日々複雑化・潜在化しており、大人の目が届かない場所でのトラブルも懸念される。今後は、生徒自身が規範意識を高め合う取組を強化してほしい。また、多様性の観点から、LGBTQや異文化理解など、現代的な人権課題についても、外部講師を招くなどして感性を磨く機会を継続的に設けることが、グローバル社会を生きる市民としての資質向上につながる。</p>
	<p>（評定）</p> <p>総合評価</p> <p>A</p>	<p>（評定）</p> <p>A</p>	
	<p>活動計画</p> <p>① 「人権学習ホームルーム活動」を年間6回実施する。「人権映画会」または「人権講演会」を年間1回以上実施する。</p> <p>② 「人権学習ホームルーム活動の事前研修会」を年間4回実施する。（5テーマ）「人権映画会」または「人権講演会」を年間1回以上実施する。教職員人権教育研修会を2回以上実施する。</p> <p>③ 「インターネットと人権」についての人権ホームルーム活動や講演会を実施する。情報の授業で情報モラルについて教える。</p>	<p>活動計画の実施状況</p> <p>① 「人権学習ホームルーム活動」を年間6回、「人権映画会」を1回実施した。</p> <p>② 「人権学習ホームルーム活動の事前研修会」を年間4回実施、教職員人権教育研修会を2回実施した。</p> <p>③ 「インターネットと人権」についての人権ホームルーム活動を実施した。情報の授業で情報モラルについて教えた。</p>	
	<p>（所見）</p> <p>学校評価生徒対象アンケートの結果から一定の効果があったと思われる。しかしながら、生徒が安心して学校生活を送るためには、教育活動全体の中で日々、人権感覚を高めていく必要がある。人権教育に関わる学校行事だけではなく、終業式等の際にも、人権尊重についての話をするなど、日々の人権教育を心がけていきたい。</p>	<p>（所見）</p> <p>学校評価生徒対象アンケートの結果から一定の効果があったと思われる。しかしながら、生徒が安心して学校生活を送るためには、教育活動全体の中で日々、人権感覚を高めていく必要がある。人権教育に関わる学校行事だけではなく、終業式等の際にも、人権尊重についての話をするなど、日々の人権教育を心がけていきたい。</p>	

## 重点課題（２） キャリア教育の要としての特別活動の充実

自己評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
重点目標	評価指標と活動計画	学校関係者の意見	
<p>①教科教育を含む全ての教育活動で取り組むキャリア教育の要としてホームルーム活動・生徒会活動・部活動等を活性化し、「かかわる力（人間関係形成・社会形成能力）」や「すすむ力（課題対応能力）」を鍛える。</p> <p>②委員会等、生徒主体の多様な組織を活性化し、「みつめる力（自己理解・自己管理能力）」「すすむ力」を育む。</p> <p>③ボランティア活動等を通して、社会参画意識を高め、豊かな人間性を育む。</p>	<p>評価指標</p> <p>①-1 部活動加入率 90%以上</p> <p>①-2 夢ログ記入週間を設ける。年間5回</p> <p>② 各種委員会開催年間2回以上</p> <p>③ ボランティア参加率 70%以上</p>	<p>評価指標による達成度</p> <p>① 94%の加入率であった</p> <p>6月、7月、9月、11月計4回実施した。</p> <p>② 2回実施した。</p> <p>③ 生徒に調査したところ31%の生徒が参加したことがあると答えた。</p>	<p>「夢ログ」の活用による自己振り返りや、夏休みのボランティア活動など、キャリア教育が計画的に実践されている。部活動や学習で多忙な生徒が多い中、将来を見据えた活動時間を確保し、外部の人との関わりを持たせている点は、視野を広げる意味で非常に価値が高い。学校外の大人との出会いは、生徒にとって単なる職業知識の獲得以上の「生き方のモデル」に触れる機会となり、進路選択におけるモチベーション維持に大きく貢献している。アンケート結果からも、これらの活動が進路意識の醸成に有効に機能していることが読み取れる。</p> <p>キャリア教育を「進路先の決定」という狭い意味に留めず、「どのような社会人になりたいか」「社会にどう貢献するか」というライフキャリアの視点での指導をさらに深めてほしい。特に、変化の激しい時代においては、一度決めた目標を修正しながら進む柔軟性も必要となる。卒業生を招いた座談会や、失敗経験も含めた大人のリアルな話を聞く機会を増やすことで、生徒が将来に対する不安を希望へと変え、主体的に人生を切り拓く力を育てていくことを期待する。</p>
	<p>（評定）</p> <p>総合評価</p> <p>B</p>	<p>（評定）</p> <p>B</p>	
	<p>活動計画</p> <p>①-1 部活動主幹部会議などを通し周知をさせる。</p> <p>①-2 経験を蓄積し、振り返りを通して自分を知り、それを進路に生かす力を育む、学びの循環を意識させるよう促す。</p> <p>② 各種委員会以外にも、委員会ごとの打ち合わせなど生徒主体で活動できる場を設定する。</p> <p>③ ボランティア活動の案内を、スタサブや掲示板等を通じて全校生徒に周知する。</p>	<p>活動計画の実施状況</p> <p>① 4月と9月に実施し、周知に努めた。</p> <p>特別活動や講演会等の経験を記録させ、定期的な振り返りの機会を設けた。</p> <p>② 各種委員会は2回実施し、それ以外の個別の委員会も実施できた。</p> <p>③ 生徒に対し周知することはできており、多くの生徒が参加しているが、調査の方法が精度を欠いており正確な人数の把握ができていない。</p>	
	<p>（所見）</p> <p>生徒の自主性、主体性を伸ばし活気のある学校生活を送ることができるようにするため、計画を立て実施してきたい。</p> <p>一部では前向きに取り組む生徒が増えてきたものの、全体的にはまだ浸透していないように感じる。これからはいろいろな機会を通して生徒と関わり、新しい校風にできるよう改善していきたい。</p> <p>夢ログの継続的な記入と振り返りにより、生徒の自己理解が深まり、進路選択や進路実現に生かす力の育成につながった。</p>	<p>（所見）</p> <p>生徒の自主性、主体性を伸ばし活気のある学校生活を送ることができるようにするため、計画を立て実施してきたい。</p> <p>一部では前向きに取り組む生徒が増えてきたものの、全体的にはまだ浸透していないように感じる。これからはいろいろな機会を通して生徒と関わり、新しい校風にできるよう改善していきたい。</p> <p>夢ログの継続的な記入と振り返りにより、生徒の自己理解が深まり、進路選択や進路実現に生かす力の育成につながった。</p>	

### 重点課題（３） グローバルな視野で活躍できる人材育成につながる教育の推進

自己評価			学校関係者評価		次年度への課題と今後の改善方策
重点目標	評価指標と活動計画	評価		学校関係者の意見	
	評価指標	評価指標による達成度	(評定)	総合評価	
<p>①姉妹校との国際交流等を通して、グローバル社会を生き抜くための国際理解力を養う。</p> <p>②コミュニケーション能力を高め、多様な価値観を持つ人々とともに納得解を得るために協働でき、共創する能力を育成する。</p>	<p>① 台湾とのオンライン交流・ベンパル活動等に参加した生徒の延べ人数 300人以上</p> <p>② 校外の人々と社会問題について討論した生徒の延べ人数 50名以上</p>	<p>① 台湾とのオンライン交流(延べ100人)ベンパル交流(117人)、中国とのオンライン交流(延べ18人)合計延べ235人</p> <p>② 台湾研修15人、県主催のプログラム10人、フューチャーデザインワークショップ16人、阿南市役所関連39人、学校主催等42人の合計延べ122人が参加</p>	B	A	<p>台湾の高校との交流活動は、本校の特色ある取組として定着しており、グローバル教育の柱となっている。オンラインツールを活用して継続的な交流を実現している点は、ポストコロナ時代の国際交流のモデルケースとして高く評価できる。生徒が異文化に触れた際の「驚き」や「発見」は、自国の文化を相対化して見る視点を養う絶好の機会である。数値目標の達成だけでなく、生徒の感想から「もっと伝えたい」「知りたい」という知的な欲望が生まれている様子が見え、語学学習への動機付けとしても機能している。</p> <p>今後は、日常会話や文化紹介のレベルから一歩踏み込み、共通の社会課題について英語で議論するような、よりアカデミックな交流へと発展させることを期待したい。また、台湾との交流で培ったノウハウを活かし、他の国や地域、あるいは在住外国人との共生といった身近な国際理解へと視野を広げることも重要である。異質な価値観を持つ他者と協働する経験は、将来グローバルな舞台で活躍するための必須の素養となるだろう。</p>
	活動計画	活動計画の実施状況	(所見)		
	<p>① 台湾とのオンライン交流5回、ベンパル活動3回を実施する。</p> <p>・ オンライン交流、ベンパル活動以外に授業や部活動を通じて交流を図る。</p> <p>② 台湾研修の際、現地で課題研究の発表を行い、姉妹校の生徒と問題解決について話し合う。また、2年次の探究活動において、必要があれば台湾の状況についてアンケートを実施する。</p> <p>・ 大阪大学のフューチャーデザインワークショップ、県教委主催のプログラムへの参加を奨励する。県内在住外国人との交流プログラムを実施する。</p>	<p>① 台湾とのオンライン交流5回、ベンパル活動2回を実施した。(3月に3回目を実施する予定)</p> <p>・ 国際英語部の生徒が中国の高校とオンライン交流を3回実施した。</p> <p>② 台湾研修では、課題研究の発表の代わりに生徒が主体となって理科の実験を行った。探究活動では、阿南市在住外国人にアンケートを取った班があった。</p> <p>・ 大阪大学のフューチャーデザインワークショップでは阿南市役所にも協力してもらい実施した。県教委主催のプログラムへの参加も例年より多かった。</p>	<p>例年実施している阿南市役所訪問がきっかけで市役所にフューチャーデザインワークショップに協力してもらったり、本校にてワークショップを実施したりしてもらった。また、県の「とくしま生徒まんなか探究活動推進事業」を活用して本校独自のプログラムも企画した。結果的に、校外の人々と関わり、社会問題について考えたり異文化に接する機会が増えた。一方、台湾とのオンライン交流の人数は増えなかった。12月に本校にて姉妹校交流ができたので、関心を持つ生徒が増えることを期待している。</p>		

### 重点課題（４） 誰一人取り残さない生徒指導の充実

自己評価			学校関係者評価		次年度への課題と今後の改善方策
重点目標	評価指標と活動計画	評価		学校関係者の意見	
	評価指標	評価指標による達成度	(評定)	総合評価	
<p>①いじめを許さない体制・環境づくりに取り組み、安全安心な学校の実現を図る。</p> <p>②社会の一員としてのモラルやマナーを習得させ、基本的生活習慣の確立を図る。</p> <p>③生徒一人一人を大切にされた指導を通じ、他者を思いやる心や自尊感情を育てる。</p> <p>④学校・家庭・地域の連携や協力を密にして、生徒の心に響く生徒指導を行う。</p>	<p>① いじめを未然防止するための個人面接と学校生活アンケート実施 年間各2回以上</p> <p>② 基本的生活習慣を確立するために、遅刻の年間総数を減らす。 10%減(前年度比)</p> <p>③ ルールやマナーを守る意識を向上させる。</p> <p>④ 三者面談を実施し、家庭との連携を図る。</p>	<p>① 個人面談3回(各学期)学校生活アンケート2回(12月・3月)</p> <p>② 前年度比6.5%増(2学期末現在)</p> <p>③ 交通マナーアップ講話(4月)携帯電話安全教室(5月)薬物乱用防止教室(10月)</p> <p>④ 三者面談1・2年次(7月)3年次(7月・12月・1月)</p>	A	B	<p>「誰一人取り残さない」という理念のもと、組織的な生徒理解研修や不登校対策が進められている。全国的に小中高生の自殺や不登校が増加傾向にある中、生活習慣の乱れや小さな変化を見逃さないための定期的な呼びかけやアンケート実施は、早期発見・早期対応のセーフティネットとして機能している。数値目標が達成されている背景には、教職員が生徒一人ひとりの状況を共有し、チーム学校として対応する体制が整っていることと推察され、保護者としても安心感を持てる運営状況である。</p> <p>生徒が抱える課題は家庭環境や友人関係など複合的であるため、関係機関との連携をさらに密にし、学校だけで抱え込まない支援体制を強化してほしい。</p>
	活動計画	活動計画の実施状況	(所見)		
	<p>① 学期ごとの面接および学校生活アンケートで生徒の実態を把握する。</p> <p>② 各種委員会・部活動および教職員による朝のあいさつ運動を行い、通学マナー等の充実に図る。</p> <p>③ 交通マナーアップ講話・携帯電話安全教室・薬物乱用防止教室を実施する。</p> <p>④ 家庭との連携を密にして、生徒の学校生活充実と進路実現を図る。</p>	<p>① 各年次ごとに分析会を実施し、生徒の情報共有が行われた。</p> <p>② 生徒会・全部活動が輪番であいさつ運動を実施し、生徒がしっかりとあいさつできるようになった。</p> <p>③ 1年次を対象に実施し、ルールやマナーを守る意識を向上させることができた。</p> <p>④ 1・2年次は1回、3年次は各学期ごとに実施し、生徒の実態把握や進路実現の充実に図った。</p>	<p>昨年度は遅刻総数を大幅に減少させた(前年度比22.5ポイント減)が、本年度は多遅刻生徒が複数おり、前年度比6.5ポイント増となった。年次集会等では日常生活に関する注意喚起ができたが、個別の指導も必要だと考えられる。</p> <p>自転車による交通事故が依然として多い傾向にある。安全で安心できる学校生活並びに登校ができるよう交通マナーやルールの遵守について指導をしていきたい。またヘルメットの着用についても喚起する。</p> <p>事故や問題行動に対しては教職員の協力体制により、管理職や関係教員・関係機関と連携を図り、迅速に対応できた。さらに積極的な生徒指導を心がける。</p>		

重点課題（５） ころとからだの健康教育の充実

重点目標		自己評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
評価指標と活動計画		評価		学校関係者の意見		
評価指標	評価指標による達成度	(評定)	総合評価			
①「早寝、早起き、朝ご飯」や適度な運動、心身の健康管理等、健康教育の充実を図る。 ②教育相談に対する教員のスキルアップ等、教育相談体制の一層の充実を図る。 ③一人一人の特性に応じた特別支援教育の充実を図る。	① 授業や保健便り等を健康管理の参考にした生徒の割合 70%以上 ② 職員研修受講後の満足度 70%以上 ③ 配慮が必要な生徒について相談したり支援体制があると感じる教職員の割合 70%以上	① 参考にした生徒 73% ② 生徒理解に役立っている教員 98% ③ 相談・支援体制がある教員 96%	A A A	教職員を対象とした生徒理解に関する研修の実施は、生徒の小さな変化を見逃さない組織的な支援体制の構築に大きく寄与している。学業や部活動に多忙な生徒が多い中で、こうした「心の安全網」が機能していることは、学校の信頼性を高める要因となっている。学校側が定期的な呼びかけを行い、生徒の意識向上に努めている点は評価できる。今後は、学校内での指導に留まらず、保護者や地域とより緊密に連携し、家庭における生活習慣の改善に向けた具体的な働きかけを強化することを期待する。「誰一人取り残さない」教育の実現に向け、生徒一人ひとりが心身ともに健康やかに成長できる環境づくりを、引き続き推進していただきたい。	引き続き、教育相談に関する研修を行い、組織的な支援体制の維持・継続に努めたい。 次年度は、保健便りの配付方法の工夫を行うとともに、生活習慣の改善に向けて家庭で協力が得られるよう、意識啓発を行いたい。 次年度も猛暑が予想されるため、熱中症事故防止に留意し、職員研修も継続していきたい。	
	活動計画	活動計画の実施状況				
	① 生徒保健委員会活動を活性化し、興味関心のあるテーマで保健便りを作成し、健康に関する意識の向上を図る。 ② 職員研修に自主研修や資料提供等も取り入れ、知識の向上を図る。 ③ 配慮が必要な生徒について共通理解を図り、対応する。適宜、スクールカウンセラーや関係機関と連携を図る。	① 生徒保健委員会が生活習慣改善等についての保健便りを作成、発行した。 年10回 ② 職員自主研修資料を共有フォルダに作成し知識の向上を図った。 7回 チェックシートによる確認 1回 ③ 配慮が必要な生徒についてスクールカウンセラーと連携を図り対応した。				(所見) 保健委員が身近な健康づくりをテーマに保健便りを発行した。HRでの掲示や効果的な啓発方法について検討したい。 職員研修や相談支援体制については、昨年度と変化はなかった。引き続き関係職員やスクールカウンセラー等と連携し対応したい。 職員研修は研修のシミュレーションの他に、自主研修資料やチェックシートを作成し理解度の確認を行った。基本的な知識や技術について振り返る必要があるため、次年度の研修内容を検討したい。

# ◎ 「質実剛健」のもと、たくましさを養い、社会の創り手としての実践力の錬磨

## 重点課題（１） 18歳成年を踏まえた主権者教育・消費者教育の推進

自己評価			学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
重点課題	評価指標と活動計画	評価	学校関係者の意見	今後の改善方策
①政治や選挙への関心を高め、社会の創り手である主権者としての政治的素養を育む。  ②18歳成年に対応し、消費者被害等の危機を自ら回避できる能力を育成する。  ③持続可能な社会の実現に向けた消費行動を実践できる能力を育成する。	<b>評価指標</b> ① 選挙権を持つ3年次生を対象に、夏の参院選の投票に行ったかどうかのアンケートを実施。行ったと回答した生徒の割合 40%以上 ※前回(R4)選挙の10歳代投票率(全国の抽出選挙区)35.42%	<b>評価指標による達成度</b> ① 7月20日(日)に行われた参議院議員通常選挙で、選挙権があった者のうち、投票に行ったと回答した割合 74%。  ② 「自立した消費者としての学びにつながった」肯定的な回答の割合 82%  ③ 「消費者市民としての意識が高まった」肯定的な回答の割合 84%	選挙における投票率の高さに象徴されるように、シチズンシップ教育が実を結んでいる。18歳成人年齢引き下げに伴い、早い段階から社会の仕組みに関心を持たせる指導が行き届いている証拠である。学校内でのアンケート結果からも、生徒が「自分たちの行動で社会は変えられる」という感覚を育んでいることが伺える。これは、民主主義社会の担い手を育てるという公教育の使命を十分に果たしていると評価できる。  高い投票率という成果を一過性のもにせず、社会課題に対して批判的に思考し、合意形成を図るスキルをさらに磨いてほしい。生徒が受動的な姿勢から、能動的な姿勢へと成長できるよう、現実社会とリンクした生きた教材を用いた授業展開を期待する。	主権者教育では、社会の問題を自分の問題として捉え、政治にかかわる意欲を高めることを目標に、政治や投票の意義を見出すための授業や出前講座を実施していきたい。  消費者教育では、社会の様々な変化に対応するため、消費者問題と金融に関する知識が必要だと考えている。消費者問題では、歴史や新たな消費者トラブルについて具体的な内容を取り上げ、消費者側の視点だけではなく企業側の視点からも考察させていきたい。  また金融経済教育では、出前講座なども活用し、家計管理や生活設計、資産形成の基礎などを、物価変動などのあらゆる変化も考慮しながら自分の将来とお金について考えられるようにしたい。
	<b>活動計画</b> ① 授業において、昨年度実施した出前講座の内容を復習し、投票への関心を高める。	<b>活動計画の実施状況</b> ① 昨年度の出前講座で教わった、選挙に行く、行かないでどのようなことが考えられるかを取上げた。		
	② 県教育委員会と連携した消費者教育に関する出前講座を、本年度も1回以上実施する。	② 消費者教育(金融)に関する出前講座(12月、1年次)を実施。		
	③ 授業やホームルーム活動、消費者講演会を通じて、SDGsや身の回りのエンカール消費などグローバルな視点で捉え、行動できるようにする。	③ 授業ではSDGsに関連して、エンカール消費やフェアトレードなどについて学んだ。消費者教育出前講座では「自分の将来とお金の話」として、将来の自分に係るお金と資産運用について学んだ。		
<b>総合評価</b> (評定) A		(評定) A		

## 重点課題（２） 持続可能な社会の実現に向けた環境教育・安全（防災）教育の推進

自己評価			学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
重点課題	評価指標と活動計画	評価	学校関係者の意見	今後の改善方策
①環境問題に強い関心を持ち、校内外の環境美化活動やボランティア活動等を通して、よのなかを自分事として捉える社会参画意識を高める。  ②教科における防災教育の充実に加え、避難訓練や防災クラブ活動をはじめとする活動を通じて防災意識の向上に努め、発災時の減災を意識した平常時の意識改革を図る。  ③生徒・教員ともに心肺蘇生法やAED使用等の研修を実施し、危機管理意識を高める。	<b>評価指標</b> ① 節電・節水の徹底 前年度より使用量減少	<b>評価指標による達成度</b> ① 電気使用量は前年比2.2%減少 水道使用量は大規模な漏水のため比較できない。	AEDの保管場所の周知や心肺蘇生法の講習について、生徒の理解度は上がっているが目標には達していない。南海トラフ地震等の大規模災害が懸念される地域特性を踏まえると、これらの防災・安全教育は生徒自身の命を守るだけでなく、災害時に生徒が「守られる側」から「地域を助ける側」となることを想定しながら研修を進めることで、危機管理意識を高めていただきたい。高い数値目標であるが、ぜひ努力を重ねてほしい。  (所見) 環境保全についての意識はSA・SSでの環境学習により、高まりつつある。また、防災に対する意識は防災クラブを中心に地域と連携した活動やSAでの防災研究を通して確実に向上している。 心肺蘇生法やAED使用等の研修については緊急対応シミュレーション研修を実施し、毎年更新をはかっていきたい。特に生徒の心肺蘇生法やAED使用の理解度は昨年より9%増加(昨年度5.9%本年度6.8%)しているが十分とは言えず、より高める工夫が必要である。	環境保全についての意識はSA・SSでの環境学習をより深化することやGXスクールの取組で向上を図りたい。また、防災避難訓練や防災クラブの活動、地域の自主防災会との連携等を通して防災教育の充実と防災意識の向上を目指したい。  心肺蘇生・AEDの生徒の理解向上に向けて、1年次は保健の授業を1学期に行い、実習を通して理解し心肺蘇生ができるようにしたい。2、3年次は教育課程にはないが、体育の授業時に復習できるようにしたい。職員研修も継続していきたい。
	② 防災クラブの活動の活性化 年間5回以上  災害を想定した避難訓練 年間3回以上	② 防災クラブによる活動 年間4回  災害を想定した避難訓練 年間3回		
	③ 心肺蘇生法やAED使用方法を理解している生徒の割合 90%以上 救急対応ができる教員の割合 90%以上	③ 理解している生徒 68% 救急対応ができる教員 96%		
	<b>活動計画</b> ① 環境防災委員による節電・節水の啓発	<b>活動計画の実施状況</b> ① 昨年度より「とくしまGXスクール」に認定され、ゴミの分別、節電・節水、環境学習に取り組んだ。校内の掲示板に取り組み内容を掲示し周知をはかった。		
② 防災クラブを中心に避難所運営ゲーム(HUG)を実施することによって、高校生が避難所運営に携われるようにする。また、地域の自主防災会と連携を図る。	② 避難所運営ゲーム(HUG)は実施できなかったが、富岡六町地区自主防災会との合同防災研修会と合同防災訓練に参加し、意識を高めた。			
③ 教職員対象シミュレーション研修や部活動生徒対象AED講習会を実施する。 教職員の参加率100%	③ 教員の参加率 95%			
<b>総合評価</b> (評定) B		(評定) B		

# ◎地域に信頼される学校となるための、教職員の資質向上と開かれた学校づくり

## 重点課題（１） 開かれた学校づくりの推進

自己評価				学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
重点課題	評価指標と活動計画	評価	(評定)	総合評価	
①体験入学、学校公開、地域説明会等を通して、積極的に教育活動の公開を推進する。 ②ホームページ等を活用して、積極的な情報発信を推進する。 ③学校運営協議会等を活用し、PTA、牛岐同窓会、地域社会との連携を図り、地域に信頼される魅力ある学校づくりを推進する。	<b>評価指標</b> ① 学校開放を積極的にすすめ、富西の教育活動にさらに興味を持った中学生の割合 80%以上 ② 学校ホームページ等の更新回数 100回以上 ③ 学校運営協議会の開催回数 3回以上 PTAに関する活動 6回以上 牛岐同窓会に関する活動 1回以上	<b>評価指標による達成度</b> ① 体験入学では88%、学校公開では85%の中学生が本校を受験するつもりであると回答。 ② 今年度の学校ホームページの新着表示件数 103回 ③ 学校運営協議会の開催 3回 PTAに関する活動 9回 牛岐同窓会に関する活動 2回	A A A	(評定) <b>A</b> (所見) 体験入学、学校公開、地域説明会等を開催して本校の取組について、中学生・保護者、地域の方に向けて情報発信しており、アンケート結果も好評であった。また、ホームページ等でも適宜情報発信した。閲覧者によりよく情報が届くよう構成を刷新した。 学校運営協議会、PTAの諸活動、牛岐同窓会を開催し、地域との連携を図りながら、信頼される学校づくりを推進した。	ホームページの頻繁な更新や富西祭等の学校行事を通じた対外発信が活発に行われており、学校の「今」が保護者や地域によく伝わる状況にある。情報公開の積極性は、学校運営の透明性を高め、地域からの信頼獲得に大きく寄与している。広報活動は、入学希望者へのアピールだけでなく、在校生や卒業生の誇りを醸成する上でも効果を発揮している。 今後は、SNS等の活用も含め、保護者や地域からのフィードバックを容易に受け取れる仕組みを構築し、寄せられた意見を学校運営に反映させることで、「地域と共に歩む学校」としてのブランド力はさらに高まるのではないかと考えられる。
	<b>活動計画</b> ① 体験入学、学校公開でアンケートを実施する。	<b>活動計画の実施状況</b> ① 体験入学、学校公開でアンケートを実施した。			
	② 各担当でイベント毎にHPを更新する。 ③ 学校運営協議会、PTAの諸活動、牛岐同窓会を開催し、信頼される魅力ある学校づくりを進める。	② 学校活動の様子について、学校ホームページから情報発信した。 ④ 学校運営協議会、PTAの諸活動、牛岐同窓会を開催し、信頼される学校づくりを進めた。PTA会報は紙配付からスタディサプリでの配信に切り替えたことで、効率よく活動状況を伝えることができた。			

## 重点課題（２） 持続可能で信頼される学校づくりの推進

自己評価				学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
重点課題	評価指標と活動計画	評価	(評定)	総合評価	
①「風通しの良い職場環境」づくりに努め、校務運営体制の効率化と充実を図る。 ②研修等の実施により、教職員のコンプライアンス意識の高揚を図る。 ③校内外の研修等を通じて、教職員の指導力の向上を図る。	<b>評価指標</b> ① 本校で働きたいと考える教職員の割合 90%以上 学校閉庁日の設定 2日以上 ② 適切に研修に取り組みコンプライアンス意識が高いと回答した教職員の割合 100% ③-1 校外での授業力向上の研修に参加した教職員の人数 15人以上 ③-2 校外模試データの分析会を年間3回実施する。	<b>評価指標による達成度</b> ① 本校で働きたいと考える教職員の割合 100% 学校閉庁日の設定 4日 ② 適切に研修に取り組みコンプライアンス意識が高いと回答した教職員の割合 100% ③ 校外での授業力向上の研修に参加した教職員の人数 39人 7月・12月に模試業者担当を招き、分析会を行った。	A A A B	(評定) <b>A</b> (所見) SS・SAによる探究活動や国際交流、生徒が主体となった学校行事や部活動など学校教育活動の充実・魅力化が推進された。本校で働きたいと考える職員の割合も100%であり、働き方改革もICT等を活用して推進した。コンプライアンス意識については、時宜を捉え適切に研修・周知を実施し、更なる教職員の意識の向上を図りたい。 教職員の授業力向上・指導力向上については、法定研修以外に各自積極的に研修に取り組み、研鑽を重ねた。増加する年内入試(国立を含む総合型選抜、学校推薦型選抜)を踏まえつつ、3月まで頑張ることができた生徒を育成できるよう、引き続き取り組みたい。また、探究活動の成果が進路決定につながった実績についても積極的に広報し、理数科を併置する本校の魅力について発信していきたい。 模試データの分析を通して、生徒の学力状況や課題を客観的に把握するとともに、入試傾向を踏まえた授業改善や進路指導に生かす共通理解を得ることができた。	各重点課題における数値目標の達成度が高く、堅実な学校運営が行われている。教職員の多忙化が叫ばれる中、業務改善を進めつつ教育の質を維持・向上させている点は敬意に値する。 学校運営を取り巻く環境は今後ますます厳しさを増すことが予想されるなか、持続可能な運営を続けるためには、教職員のみならず外部人材の活用、学校事務の効率化など、既存の枠組みにとらわれない発想が必要である。地域のリソースを教育活動に最大限取り込み、「地域全体で子供を育てる」というシステムを構築し、次世代に誇れる持続可能な学校モデルを確立していただきたい。
	<b>活動計画</b> ① 働き方改革や職場環境の充実に向けて推進する。	<b>活動計画の実施状況</b> ① ICT機器や生成AI・クラウドの活用により働き方改革や職場環境の充実に取り組んだ。			
	② コンプライアンス研修を毎月実施し、教職員の意識の高揚を図る。 ③-1 長期休業中等を利用し、校外研修に参加し、資質向上に努める。 ③-2 教員間で生徒の学力状況や課題を共有し、進路支援の質を高める。	② コンプライアンス研修を毎月実施し、教職員の意識の高揚を図った。 ③ 県教委等、他校、予備校等主催の研修、SSH事業による学校視察を通して、教職員の指導力・資質向上を図った。 模試分析を通して今後の授業展開について協議し、入試の傾向を踏まえた思考力育成の方向性について共通理解を図った。			